

1995年から「世相漢字」というものが、毎年、選ばれています。今年は「戦」ですね。世界的にはウクライナ問題を始め、戦争が絶えることなく続いています。またサッカーも「戦」ということでは意味するところがありますね。皆さんでしたらどんな漢字が浮かんできますか？ 私は今年の漢字を考えていますとふと「国」という漢字が浮かんできました。戦争もそうですし、サッカーワールドカップも国の威信をかけての戦いです。加えて私は今年教会で多くの方々が召されました。これもまた私たちの国籍は天にあるのごとく天の御国に帰ってゆかれました。すべてのものは神からのものであるにもかかわらず自分の国を少しでも大きくするためによその国に攻め入って自分のものとしようとしています。あらためて国とは何だろうかと考えさせられたことでした。

さて、今朝は、クリスマスで東方の博士たちが、イエスを礼拝したことから、学びたいと思います。まず第一に、博士たちが、礼拝を第一にしたということに目を留めましょう。今日の説教題はそのまま「クリスマスは礼拝の日」ですが博士たちは、まさに、礼拝を第一にした人たちでした。

ここに登場する博士たちは、もとの言葉では「マジ」と言って、新共同訳では「占星術の学者たち」と訳されています。「占星術」などというと怪しげなものに聞こえますが、彼らは、天体を観測する人たち、今日の天文学者だったと思われまゝです。天文学は古代の科学の基礎で、天体の観測によって地上の距離を量るなど、それは、測量などの他の技術に応用されました。ですから、彼らは、天文学ばかりか、さまざまな科学技術にも通じていたと思われまゝです。

彼らが、自分たちの国で不思議な星を見た時、その星を追ってユダヤの国まで来たのは、なぜでしょうか。天文学者である彼らにとって、その不思議な星は、追っかけて行って観測するだけの値打ちがあったかもしれません。しかし、彼らは、天文学のために星を追っていったものではありません。また、彼らが、政治にかかわっていたなら、星の観測のついでに、ユダヤの状況を見聞きしてきたら、一挙両得と、一般的には考えることができるかもしれません。しかし、彼らは、学問上の好奇心からでも、政治的な動機からでもなく、まことの救い主を礼拝するためだけに、自分たちの国を旅立ち、ユダヤに向かいました。それは博士たちは、学問よりも、政治よりも、礼拝を第一にしたということです。

私たちも、博士たちから、「礼拝を第一に」という態度を学びたいと思うのです。特別な奉仕あるいは当番にあたっていなくても、礼拝に集うこと自体が素晴らしい奉仕です。ここ数年はコロナのことがありますので確かに気軽に出席するのが難しい面があります。それでもその人なりの、その人にしか出来ない礼拝の方法があると思います。例えば奉仕にしても奉仕の目的は、それを通して、神を礼拝することです。奉仕の目的を見失うと、奉仕がただ負担になるだけで、そこから喜びを得ることができなくなります。また、礼拝は、神を信じる人々、神を求める人々と「共に」ささげるところに意味があります。しかし、礼拝で神と交わることはそっちのけで、誰かに会いに来るだけになっているなら、それも礼拝が第一のものとなっていません。よくアメリカではクリスマスというのは久しぶりに家族が集まる時であるといったことが言われます。それで良いと思います。ただクリスマスの目的は休日をゆっくり過ごすことや、家族が集まる時以上に神様を礼拝する時であることを覚えたいと思います。この博士たちは、他の何のためでもなく、ただ救い主を礼拝するためにやってきたのです。

第二に、博士たちの礼拝から学ぶことは、「みことばによる礼拝」ということです。博士たちは、星をたよりに、東の国を出発しました。そして、救い主はユダヤの首都エルサレムにいるだろうと考え、ヘロデの宮殿にやってきたのです。しかし、ミカ書 5:2 に「ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」とあるのを聞いて、彼らはベツレヘムに向かいました。最初は星に

導かれた博士たちは、今度は、神のことばに導かれてベツレヘムに向かっています。博士たちが、自分たちの国で見た星を、救い主の誕生のしるしであると、判断したのも、おそらくは、彼らが聖書に「私には彼が見える。しかし今のことではない。私は彼を見つめる。しかし近くのことではない。ヤコブから一つの星が進み出る。イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみを、すべてのセツの子らの脳天を打ち砕く」民数記 24:17 とあるのを知っていたからでしょう。博士たちを、ほんとうの意味で救い主に導いたのは、星の光ではなく、実は神のことばでした。

星の光は、何か目に見えるしるしを表わしています。私たちは、信仰によって、悪い習慣を止めることができました、病気が良くなったとか、願っていたものが手に入ったなどという目に見える結果を得ることができます。しかし、いつでも、目に見えるしるしが与えられるとは限りません。目に見えるものが何もなくても、ただ静かに神をあがめ、神を待ち望むという信仰が求められることもあるのです。目に見えるものだけによって左右されると、それは星の光だけを頼りに暗闇の中を旅するようなもので、神の計画全体を見ることができなくなってしまいます。聖書は、神のみこころの全体を教え、私たちの行く道を照らすものです。最初は、目に見えるもので導かれたとしても、次には神のことばによって導かれ、神を正しく礼拝していきたいと思います。神学校の恩師はこんなことを言っていました。「私たちはどんな暗闇にいても2つの光があるなら信仰者として日々過ごすことができる。一つは行くべき目標にある光であり、もう一つは足元を照らす光である。

では、みことばに導かれるためには、ただ聖書の知識があればそれで良いということなのでしょうか。聖書の知識は多いにこしたことはありませんが、もっと大切なのは、その知識をどう用いるかということです。ヘロデ王から「キリストはどこで生まれるのか。」と聞かれたエルサレムの学者たちは、「それはユダヤのベツレヘムです。」と正しく答えることができたのに、その中のだれひとりとして、キリストを礼拝するためにベツレヘムに向かった者はありませんでした。彼らは聖書の専門家たちでその知識を誇っていました。しかし、彼らは、神のことばに聞き従う信仰がなかったのです。しかし、東方の博士たちは、聞いたことばにすぐさま従っています。9節に「すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。」とありますから、博士たちは、すでに夕暮れになっていたのに、ベツレヘムに向かい、あたりが暗くなるにしたがって、その星がいつそう輝きを増すのを見たのでしょう。博士たちは、「エルサレムで一夜を明かしてから、ベツレヘムへ。」とは考えないで、聞いたみことばにすぐさま従っています。私たちも、このように、神のことばに聞き従うことによって、ほんとうの礼拝をささげることができるのです。

博士たちの礼拝から学ぶ、第三のことは「礼拝とはささげるもの」だということです。時たま、「今日は良い礼拝を受けました。恵まれました。」と言う人がいます。礼拝は、神からの祝福を受け取る場ですから、そういう言い方も間違いではないと思いますが、やはり、礼拝とはささげるものです。最高のお方に、私たちの最善のものをささげることが礼拝です。博士たちは、イエスの前にひれ伏し、宝の箱から黄金、乳香、没薬などの、高価なものを取り出し、ささげています。彼らのささげものは、キリストがどんなに価値あるお方かを表わしています。もし、博士たちが、キリストを単なる人間と見なしていただけなら、こんな高価な贈り物を、貧しい夫婦の赤ちゃんに与えるようなことはしなかったでしょう。英語のWorshipという言葉は、worth（価値、ふさわしい）という言葉から来たといわれます。私たちは、神を、神としてふさわしい態度であがめているのでしょうか。救い主にふさわしいものを、キリストにささげているのでしょうか。

旧約時代には、ささげものを持って来ることなしには、礼拝は成り立ちませんでした。それぞれが、自分たちの羊や家畜の群れの中から、傷のない一番良いものを選んでささげました。新約の時代には、動物

のささげものは不必要ですが、礼拝にささげるべきものを携えてくるという原則は変わってはいません。では、私たちは、何をささげるのでしょうか。何を携えてくるのでしょうか。それは私たち自身をささげるのです。ローマ 12:1 に「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」とあります。

からだをささげるというのは、具体的にはどうすることでしょうか。それは肉体労働をすることでしょうか。それができない人は頭を使って何かをすることでしょうか。それは奉仕活動に忙しくすることを意味しているのでしょうか。そうしたことが全く含まれないわけではありませんが、ローマ人への手紙の「からだ」は、私たちの五体だけではなく、その五体を使って生活をしている、私たちの日常の生活のことを指しています。ですから、「からだ」をささげるというのは、この、週のはじめの日の礼拝で、この一週間の生活を神にささげていくことを意味します。日曜日の礼拝が月曜日から土曜日の生活の中に反映されていくよう努めていく、それが神への一番のささげものと言えるでしょう。礼拝を一週間の出発点にするのです。

それと同時に、礼拝は、一週間の生活のゴールでもなければなりません。月曜から土曜までの生活は、次の日曜日への準備なのです。東方の博士たちが、黄金、乳香、没薬を途中で手に入れたのでもなく、思いつきでささげたのでもなく、自分たちの国を出発する前から準備していたように、私たちの一週間の生活が、次の日曜日にささげる礼拝のための準備になっていくなら、どんなに神は喜ばれることでしょうか。礼拝から始まり、礼拝に向けていく一週間、礼拝が中心となって回転していくような生活、それこそが、キリストにささげる私たちの「黄金、乳香、没薬」です。信じているのに神は何もしてくれないという方がいらっしやいます。しかし神を信じているというのであれば何を神に捧げているというのでしょうか？ 神と人のためにどれだけ時間と労を取ったというのでしょうか？

礼拝のために、救い主を礼拝するというただひとつのこのために、準備をし、犠牲を払った博士たちから、私たちも、礼拝の心構えを学びましょう。そして、そうする時に博士たちが味わった「この上もない」喜びを私たちのものとしましょう。